

中川 晴賀
伊藤 朱夏
河内 彩夏
若狭 優奈
大谷 優理
横野 茜
小野 詩織
大西 美智
吉武 明智
木田 菜花
東江 萌花
佃 菜帆
新間 英花

協力 薬袋研究室

二〇二四年三月発行

雑司ヶ谷霊園 (p.8)

鬼子母神堂 (p.5,6)

都電荒川線
鬼子母神前駅 (p.4)

雑司が谷公園 (p.7)

目白駅 (p.1)

目白通り (p.3)

目白庭園 (p.4)

ぞうしがやがやたんけん

〜 景観をつくるモノたち〜

この冊子は、日本女子大学 家政学部住居学科の学生の視点から、雑司ヶ谷の魅力を紹介するために、雑司が谷未来遺産推進協議会の活動の一環として作成したものです。

0 20 40 80メートル



目白駅の魅力

赤い鳥

文芸雑誌「赤い鳥」は、鈴木三重吉によって主宰され、著名な作家や詩人の協力によって児童文学の基礎として刊行されました。この赤い鳥社兼鈴木三重吉宅が現在の目白三十八丁目にあったことから、目白には、「赤い鳥」にちなんだ施設が複数あります。

ステンドグラス

目白駅舎の改札上部には大きなステンドグラスがあり、そこに美しい花々が描かれています。



▲目白駅のステンドグラス

銀鈴の塔

目白駅を出て左手には、「銀鈴の塔」があります。一定の時間になると、近くの東京音楽大学さんが提供した音楽が流れます。目白駅の駅長さんとまちづくり協議会が協力し、タイルの色まで全て決めて作ったものです。一体となったエレベーターは利用者が非常に多く、朝には行列ができるほどです。



▲銀鈴の塔

ポール

目白駅を出て右手に、高いポールが立っているのを知っていますか？このポールは、一九六四年の東京オリンピックの時に、国旗を掲げるために国立競技場に立っていたものです。



▲国旗を掲げるためのポール

目白駅前 横断歩道

目白駅を出て右側、トラッド目白前の横断歩道は、昨年作られました。以前までは、目白駅からトラッド目白に行くには遠回りをして横断歩道を渡らなければならず、非常に不便でした。新しい横断歩道を新設するにあたって、大きな樹木が邪魔にならなってしまうという植栽の問題が挙げられました。しかし、歩道の一部を膨らませることで、歩行者が通る幅を確保し、新たな横断歩道の新設に成功しています。

まちの植栽を守りつつ、歩行者の動線を考え抜くことで現在の目白駅の風景が作られています。



▲現在の目白駅前横断歩道

(文責 河内 彩夏)

案内サインを設置しました

案内サイン設置の様子

雑司が谷未来遺産推進協議会では、案内サインの設置に取り組んでいます。その背景として、雑司が谷は住宅地と観光地両面の顔を持っていることが挙げられます。住民と来街者が使用する道を棲み分けるため、歴史的建造物（未来遺産）をつなぐ、『雑司ヶ谷の歴史と文化をたどる道』の設定と案内サインの設置が取り組まれています。昨年、本格的に設置が行われ、雑司ヶ谷霊園と旧宣教師館への案内サインが計7か所、設けられました。



▲実際に設置された案内サイン



▲案内サイン設置時の様子 (左右ともに)

案内サインとこれから

目白庭園・自由学園明日館

現在、目白庭園、自由学園明日館への案内サイン設置に向けて、活動を行っています。

目白庭園、明日館ともに住所は「雑司ヶ谷」ではありませんが、江戸時代、雑司ヶ谷村と呼ばれていた範囲は現在よりも広く、二つの施設も含まれていました。「雑司ヶ谷」の文化として、これらを守ってきたいという協議会の想いにより、雑司ヶ谷の未来遺産として、多くの人に訪れてもらうべく、サインの設置が検討されてきました。

目白駅周辺と、互いを結ぶ道への設置を計画中で「JRや区と交渉を行っています。今後の案内サイン設置拡大に期待したいです。」



▲新たな案内サイン設置に向けた話し合いの様子

雑司ヶ谷のまちにはこのような案内板が多く設置されました。まちを歩いて、ぜひ探してみてください。

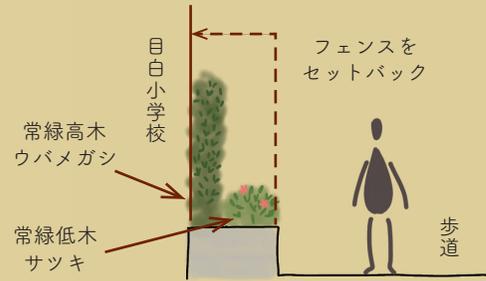


▲実際に設置された路面の案内サイン

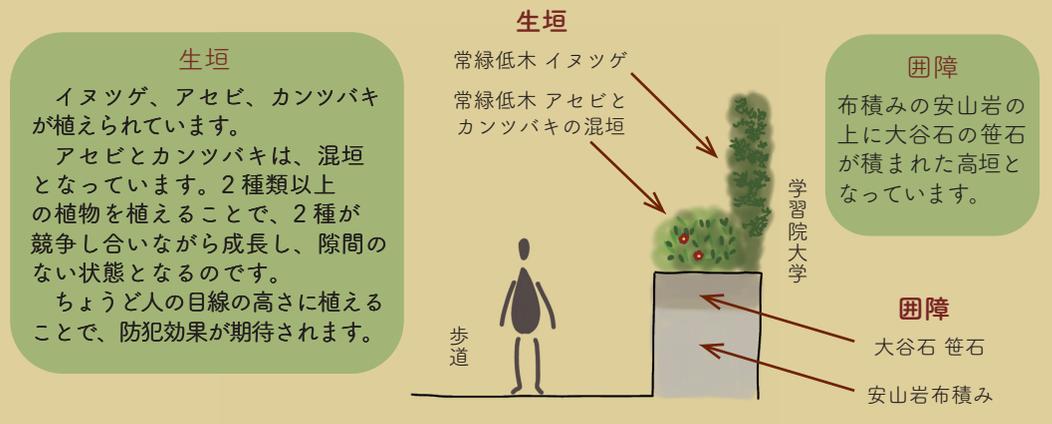
(文責 伊藤 朱音)

目白駅を出て、目の前に広がる大通りが「目白通り」です。
目白駅、雑司が谷駅ユーザーにとって、普段から利用頻度の高い道ですが、沿道の植栽に注目したことはありませんか？そして皆さんは目白通りを通るとどのような気持ちになりますか？ここでは目白通り沿いの植栽と景観について、学生が講義で学んだことを含めて考えます。

目白小学校
もとは植栽がなく、フェンスで仕切られただけの質素な景観だったそうです。しかし、フェンスをセットバックさせ、そこに植栽を植えることで、歩行者にゆとりを持たせることができました。
今では緑豊かな歩道に生まれ変わっています。



学習院大学
囲障と生垣の2種類で植栽が構成されています。複数の手法を利用することで、大学にふさわしい植栽で、まちに面しています。



目白小学校と学習院大学は、目白通りを挟んで向かい側に位置しています。そして、この目白通り沿道には、銀杏並木が続き、秋になると黄色く染まる様子が非常に魅力的です。
これらの植栽と銀杏を横目に、温かな陽を浴びながら目白通りを散歩すれば、素晴らしい時間を過ごすことができます。
今まで何気なく通っていた目白通りの景観は意図的に作られていたことを学び、これが私たちの空間を豊かにしていたのだと気付かされました。



目白庭園

「赤鳥庵」という名称は、文芸雑誌「赤い鳥」にちなんでいます。ここにかかっている額は、「赤い鳥」の主宰者、鈴木三重吉の長男・珊吉によるものです。(赤い鳥についての詳細は p.1 参照)



六角浮き見堂の頂部の飾りは、「赤い鳥」をイメージした益子焼です。ここから庭園の様子を一望でき、四季折々の変化を楽しむことができます。

都市の中に失われつつある自然や伝統に触れ合う場として、平成二年に開設された施設です。
この施設の中で最も特徴的なのが、「赤鳥庵」と呼ばれる平屋建ての数寄屋建築です。ここでは、茶道などのイベントが行われ、地域住民間の交流がなされています。
数寄屋建築ならではの質素で落ち着いた意匠が日本庭園に溶け込み、ここが都会であることを忘れるような空間です。

(文責 伊藤 朱音)

おすすめスポット

都電荒川線鬼子母神前駅

ここは駅のすぐ横に踏切が設置されており、列車が駅に到着すると、出発するまで踏切が閉じっぱなしになっています。都内では地下鉄が多いため、列車全体をこれだけ長い時間見ることができません。都電荒川線ならではの楽しみは、都電荒川線なら得意なところ。たった二両の可愛らしい都電荒川線を思う存分楽しむことができ、新鮮な体験ができる踏切は、下町の雰囲気を感じることができるところとなっています。



(文責 大谷 優理奈)

鬼子母神堂



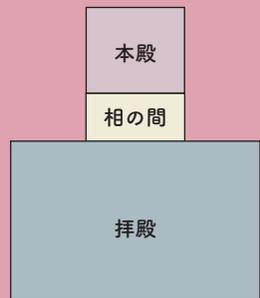
鬼子母神堂は、永禄四年（一五六一年）に目白台で掘り出された鬼子母神像を、天正六年（一五七八年）に安置したことが始まりです。寛永二年（一六二五年）には社殿が造営、正保三年（一六四六年）には宮殿が奉納されました。祀られている鬼子母神は兒女を護る善神として信仰され、子宝や安産などが祈願されています。境内には樹齢七百年ほどの銀杏の巨木があり、触れると子を授かるという話から「子授けイチヨウ」と呼ばれています。

《近年の鬼子母神堂の事績》

- 昭和三十五年二月 東京都有形文化財に指定
- 昭和五十一〜五十四年 解体・江戸時代の姿に復元修理
- 平成二十八年七月 国の重要文化財に指定

重要文化財の指定

「雑司ヶ谷鬼子母神堂・雑司ヶ谷鬼子母神堂開堂三百五十年・重要文化財指定記念」によると、鬼子母神堂は「拝殿」「相の間」「本殿」の三つの建物で構成される権現造りで建てられ、異なる意匠と造形を備えた複合建築です。



▲鬼子母神堂の構成

本殿内では、細部の装飾に安芸地（現在の広島西方）の特徴を持っています。加えて、大名家による寺社造営状況や幕府による建築規制への対応もみられ、江戸時代の寺社造営の実像をみることでできます。

これに対し拝殿は、正面の軒唐破風付向拝や千鳥破風、装飾的な架構材など、江戸時代中期の華やかな意匠で造られた礼拝空間となっています。

このような特徴から、本殿と拝殿とで異なる特徴を持つ建造物であり、歴史的・意匠的に評価され平成二十八年（二〇一六年）七月に重要文化財に指定されました。

参考文献 「雑司ヶ谷鬼子母神堂：雑司ヶ谷鬼子母神堂開堂三百五十年・重要文化財指定記念」 威光山法明寺 近江正典編集 勉誠出版 二〇一六年

広島の大工が造る本殿

本殿内に入ると、数多くの装飾が施されています。建立当時、江戸近辺では多くが楕円の装飾でしたが、鬼子母神本殿は安芸などで起用されていた正円に近い装飾となっています。住職さんによると、安芸（広島）の大工が建立に関わったことで、江戸で流行していたより、古い装飾が起用され、安芸風の様式を持つ寺院となったそうです。

当時の江戸の流行りの形（楕円寄り）→新しい
 当時の安芸で使われていた形（正円寄り）→古い



現在も活用される格間

本殿は、豪華な金の折上格天井で彩られています。よく見ると、格天井の中に二ヶ所だけ凹んでいる格間があります。住職さんによると、以前は線香を焚くための空気の流れ道として使われていたそうですが、重要文化財の指定によって火気厳禁になってからは使用されなくなりました。しかし、近年新型コロナウイルスの影響でその格間を利用して換気扇を設置し、最大限に活用されています。

空襲被害

護国寺から雑司ヶ谷一帯は、東京大空襲の際に周りが焼け野原となる中、奇的に火災から免れた地でした。住職さんによると、この地域は天皇家の墓地が近くにあり、一瞬爆弾を落とすのをやめたため焼けずにすんだそうです。飛行機は墓地前の地帯を避けるように航行したため、現在のような墓地前の地帯が帯上に残りました。地域の人々は地域の焼け残りを鬼子母神の恩恵とみなし、奇跡の地と呼んできました。



▲東京大空襲による被害（オレンジ部分）と現在の地図

火災から守る放水銃

貴重な文化財を火災から守り後世に残していくことを目的として、一月二十六日には「文化財防火デー」が制定され、毎年全国各地で文化財での防災訓練が行われています。

鬼子母神堂では、「放水銃」が設置されています。本堂の近くに防災施設ポンプ室が設置されており、住職さんによると、火事に備えて百tの水が貯められています。火事が発生した際には屋根の上から大量の水をかけることで、鎮火させることができます。

《訓練の流れ》

- 事前避難
- 絵馬や画像などを持ち出す
- 初期消火を行う
- 放水銃による消火



▲消火ポンプ室



▲景観に配慮した放水銃

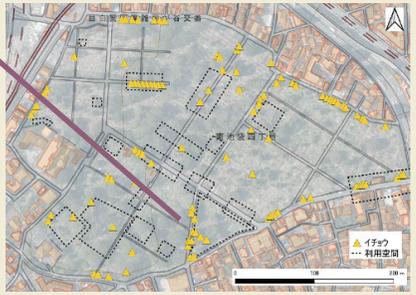
（文責 若狭 澤・大谷 優理奈）

*本来、鬼子母神の「鬼」という字には一角目の点はなく、「鬼」という字になります。しかし常用漢字ではないため、ここでは「鬼」という表記にさせていただきます。

	1950年～2000年代	2000年代以降
生活空間・滞り場所としての利用	野球、凧揚げ、肝試し、かくれんぼ、銀杏拾いなど。。	散歩、墓巡り、楽器の練習、ラジオ体操など。。
動植物の生息観察管理としての利用	虫取り、野良犬・猫、カラス、フクロウ、タマシシ、など。。	野良犬・猫、カラス、花壇の管理、枯れ葉掃除など。。



銀杏をベースに見立てて野球をする



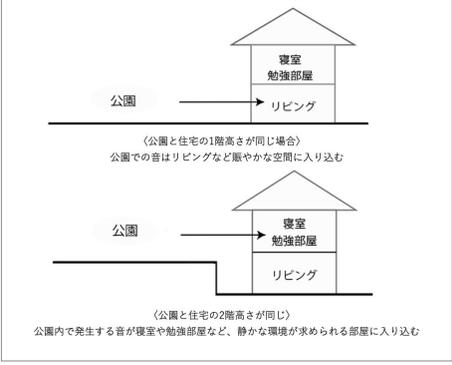
近隣住民の雑司ヶ谷霊園利用の変化

学部四年 大西明

開園一五〇周年を迎える雑司ヶ谷霊園を対象として、どのような空間利用がされているか、研究を行いました。文献調査から、御鷹部屋として使われていたことや、開園後も徐々に敷地の拡張をしたことが分かりました。ヒアリング調査から、過去と現在の利用を比較すると、野球や凧揚げなどの遊び場から、散歩やラジオ体操など、移動や滞り目的の利用に変化していることが分かります。雑司ヶ谷霊園は、子供時代の思い出が残る場所であり、生活空間としても利用することが明らかとなりました。

研究内容紹介

公園内の施設の配置や開設場所の選定などが、公園の計画を工夫することも問題の改善の手がかりになります。



また、公園と周辺の住宅の高低差など、まちの構造と住宅の配置の関係も要因と考えられました。図に示すように、公園と住宅に高低差が生まれることにより静かな環境が求められ、寝室や勉強部屋に音が入り込みやすく、騒音が感じやすくなります。

子どもの遊び声の大きさ

騒音の認識に関する考察

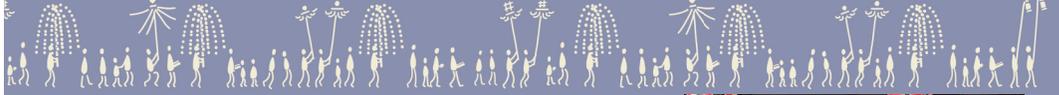
修士一年 吉武美智

近年、外で遊ぶ子どもの声に近隣住民から意見が寄せられている実態から、より良い子どもの外遊び環境に向けて研究しています。昨年度、雑司が谷公園にて騒音計を用いて音の測定を行った結果、子どもの声は大きくはあるものの風や交通音と同レベルであることがわかり、なぜ子どもの声騒がしく感じられるのかを文献調査により考察しました。背景の一つに、子どもの声は大人と比べ非常に高く、人間の耳によく聴こえやすいことが考えられました。

御会式大祭

体験記

普段は、静かな雑司ヶ谷の街ですが、御会式大祭が行われる三日間は、一年の中でも最も熱気に包まれる期間です。御会式大祭は、毎年十月十六日から十八日にかけて盛大に行われる伝統のある行事です。その歴史は古く、享和・文化文政の頃から続いているそうです。白い和紙の花を一面に付けた高さ三〜四メートルの「万灯」を持ち、太鼓などを叩きながら鬼子母神までゆつくりと練り歩きます。講社によって万灯や半纏に特徴があり、ずっと見ていても飽きません。



(文責 横田 茜)

各日、約二時間をかけてまを練り歩き、鬼子母神堂に向かいます。祖師堂前で講社ごとに披露されるフィナーレでは纏(まとい)を用いた力強い舞が見られ、万灯練り供養でひときわ盛り上がった場面でした。今年度は、十七日に日本女子大学から四人の学生が御会式大祭に参列し、行列の先頭で、高張持ちを担当しました。提灯は想像以上に重く、二人で高さを合わせて歩くのが大変でした。先頭を歩くのは、責任感があり、緊張しましたが、貴重な体験となりました。

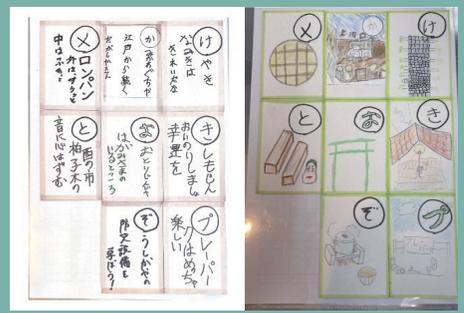
参考文献 豊島区HPより
https://www.city.toshima.lg.jp/1321b/unka/kanko/moyoshi/aki/009732.htm

雑司が谷公園カフェ

雑司が谷公園内にあるカフェ「丘の上カフェ」をご存知でしょうか？丘の上カフェでは地域の交流拠点となることを目指し、昨年の七月から住居学科の学生が月替わりでドリンク販売・イベント企画を行なっています。特に、毎月第三土曜日に実施しているイベントでは、雑司ヶ谷の魅力伝えるカルタづくりやデンマーク留学経験者によるアート作品展示など地域の魅力や学びを生かした企画を実施しました。私自身もカフェ運営に参加したことで、雑司が谷公園が多くの人に愛されている公園であることを実感し自分ごととしてまちづくりについて考える良い機会となりました。今後も様々な企画を行なっていきますので丘の上カフェの取り組みにご期待ください。



▲1月に行なった「丘の上テラスでのHyggeな時間」学生がデンマーク留学で作った作品展示・ブラバン工作の様子



▲10月に行なった雑司ヶ谷のカルタづくり企画

(文責 小野 詩織)

まちを敷地と仮定した 学生作品紹介

『庭のある家』

雑司ヶ谷の住宅地に設定された敷地に、若い夫婦のための暮らしの場、豊かな住空間のある独立住宅の設計
ウチとソトが馴染む家

学部一年 木田 菜

この敷地は、シンボリックな既存の木が二本立っている点や街中に位置している点、L字型に路地に面している点等が特徴的である。家庭菜園を一つのテーマとしており、閉じてプライベートを保ち、住宅としての機能を備えながらも屋上まで続く動線の中に開けた畑を設けた。都市の中で家庭菜園を行い、近隣住民とのコミュニケーションのきっかけとなるような内と外両方の生活を充実させる家を設計した。

外部空間の吹き抜けは、雨水を貯めることで水撒きに活用する。様々な地面のレベルがあるため、菜園をしたり、食事をしたり、一人でくつろいだりとマルチに使うことができ、どこにいても自然を感じられる空間を作った。



『都市の中の棲家』

雑司ヶ谷の敷地を用いて、独立して生活するひとりのための異なる住宅3つが集まり生まれる豊かな住空間の設計

曲線をつながる

学部二年 佃 菜帆

三住戸は一つのR壁で緩やかにつながり、ガラスで空間を隔てている。R壁に沿わせながら緩やかにレベル差をつけることで、空間に変化をつけながら居場所を作り出すことが可能になる。R壁を外側へと拡張し、大きなガラスとともに外部と室内の境界を曖昧にすることで、自然と内外を融合する空間を構成した。

曲線と直線の交わりにより、特定の機能を意図しない恣意的空間が生まれ住まい方に個性を見出す。Rの共有壁は住戸間での視線や採光等を調整し、適度な距離感と落ち着きを検討。不確定な機能を持つR壁と直線の空間により探求性のある住まいを構築した。



『街とくらす、21人のための家』

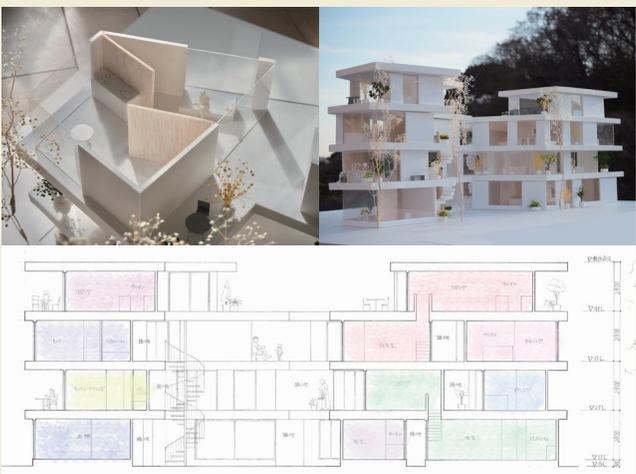
鬼子母神参道に面した敷地を用いて、街の人々と共にくらす、地域とつながり、地域に開かれた集合住宅の設計

学部二年 東江 萌花

路地をつながる

敷地を挟む鬼子母神参道と商店街からさらに細い路地がのび、高密度に住宅が広がっていく周辺の様子に魅力を感じ、敷地の中にも路地を引き込みたいと考えた。

全十戸の住戸と二つの店舗は路地を挟んで配置される。路地は通路としての役割のほか、通風や採光にも役立ち、さらには半屋外空間として室内空間の延長としても利用される。自分だけを使う路地や隣の家族と共用する路地が混在し、生活の様子が外にも滲み出す空間を目指した。



『学童保育のための空間』

多様な活動を行う子どもに対して、それぞれが心地いいと感じられるような環境や子ども居場所をつくる設計

学部三年 新間 英花

空間探し

敷地は周辺の木密地域と違い、開放性が高く、樹木が多い。そのため、自然光を取り入れやすく、また緑が多いことで、夏に快適なクールスポットを生み出しやすい。自然光と緑をテーマに設計を行った。

人を囲み込むような空間を提案し、夏の場所と冬の場所、二つの居場所をくぼみ空間に作る。

その空間を「居室」として配置していく。夏の場所を日射が当たりづらい北側に設置し、冬の場所は日射が当たりやすい南側に設置した。室外は、夏は樹木により涼しく、冬は熱容量の大きいコンクリートにより更に暖かく過ごすことができる。室内は、夏と冬でそれぞれの活動が行いやすいよう、動的空間と静的空間を区別するよう配置、三つの高さの壁面によって室外空間の子どもの遊びの充実などにより、室内と室外の夏冬が混ざり、季節によって様々な場所に子ども達が自然に移動したくなるような建築空間を目指した。

